

# 東北三地域 横断座談会 から 石巻 Ⅱ 編 Vol. 1/3

「かわら版について」  
このかわら版は、平成時 24 年 9 月 26 日に開催された東北三地域・横断座談会「石巻Ⅱ編」の要旨をコンパクトにまとめ再録したものです。

【はじめに】 高橋圭太郎 (進行)

何が、東京の僕らに出来るのか？それが石巻を選んだ始まりでした。震災から一年が過ぎた頃、石巻へ出向きました。雨が降って肌寒い中瀬の風景に、卵の様な萬画館がポツンと寂しくありました。漫画の世界にある様なスペイシーな外観が、あの津波後という異常で殺伐とした風景と重なり、現実が現実ではないかのように重なって見えました。それが石巻を選び、この座談会開催の起因となったのです。石ノ森章太郎先生の作品から語られるメッセージが符合する、目の前の現実、救済や支援とは？我々にはいったい何が出来るのか？と云う自問自答が在りました。

まずは石巻から始めてみる事と致しました。

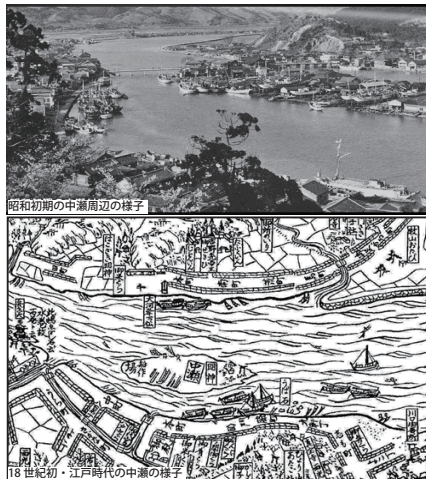
ショッカーにも天災などにも負けるわけにはイカン!



中瀬に建つ「石ノ森萬画館」



石巻市の位置



◎石巻の歴史：江戸時代の石巻港は、北上川水運によって南部藩領からも米が下り、河川交通と海運との太平洋側の結節点として、日本海側の酒田港と列んで奥州二天貿易港として全国的に有名であった。また、東廻り航路の基点として、北前船による江戸との交易も盛んで、江戸期の長い期間において石巻港から江戸へ送られた米は江戸市中で流通する米の半数を占めたと言。藩政時代には名実ともに仙台藩の経済の中心地として栄えた。

●黒木正郎 (ナビゲーター・石ノ森萬画館設計担当、この回では全ゲストを結ぶ、唯一の人物)  
私にとって石巻は初めての土地で、「石ノ森萬画館」の設計にあたり、まず此処の歴史・風土を調べることから始まりました。

江戸時代、中瀬は北上川流域の物資の集散地として栄え、近くには支倉常長の遣欧使節の出港地があり、また後には造船業が興りました。調べているうちに、かつてのメートルの津波に襲われたことも分かり、萬画館の重要資料はメートルの位置にしました。3月21日の際は一階が被災しましたが、幸い重要資料は無事で、修理の後2013年9月には本格的に再開できました。現在、萬画館には年間20万人が訪れています。

まず、私ここで「コンパクトシティ」を提案したいと思っています。このコンパクトシティとは、単に縮小した街の意味ではなく、「中身の濃い地域づくり」を意味しています。「文化による街づくり」も復興のコンセプトの重要なポイントの一つです。中瀬を大きな舞台に見立て川岸と対岸が客席になったら、世界に一つの「劇場都市」ができる。中瀬は「舞台」、文化の土壌が無いところに文化は育たない。「場所の力」、この街には「人と場」が重なる場所がある。自分が本当にいいと思ってるものっていうのはなかなかないでしょう。

「無い物ねだり」ではなく、「在る物探し」の必要性と再確認です。これからの石巻を考えると、コンパクトシティを目指すべき街だということ、そして、持続可能な…、というのがキーワードだと思っています。

中瀬には萬画館がありますが、「自由の女神」があっても面白いのではないかと。例えば、ニューヨークの中心マンハッタンにならって、「マンガタン」っていうのはどうでしょうか(笑)。出来ることを淡々とやっていって、そこに付加価値を付けていくと、上手くいくと思います。石巻は、世界的な観光地になる地です。食べ物、歴史がある都市は必ず栄える…。石巻を視ると地形や土地にパワーがある。20世紀型の開発ではない開発を目指せる都市だと思

います。これからは是非、石巻へ出向いて欲しいと思います。

●阿部紀代子 (料亭八幡家・女将、地元の世話人)  
その当時、私の店も300mの浸水をしました。何故その場で店を再開するのか？という問いを頂いたとき、「中瀬」この場所が石巻の顔だと思いました。対岸の方は、街に出ていくときに石巻に行くという事からも解る通り「石巻」を象徴する場所なのだと思います。震災は、地元だけではどうしようもない状態でしたし、自分達だけではどうにもならない状態でした。当時は音楽を聴く事すら気持ちが悪く湧き立たず、苦痛でした。100日を過ぎて、きれいな物を見て、音楽を聴いて心打たれて涙が出ました。

外からの支援は、地元で何かをしようとする芽を摘まないことが必要です。そして、一方で地元の受け皿が必要です。受けるのか受けないのか？ 入口となる地元で吟味する必要があるはず。先の「バレエが街にやってくる」でも、かつてバレエ研究所が石巻にありました。そこが街の皆さんの心の記憶の一部を動かし、大きな感動になった。それでそれを知る方々に一番にお話して、実現に至ったんです。

強い思いをもって石巻を訪ねてくれる若者が多いので、そういう彼らに頼む仕事は何か？と考える接しています。商業ベースではなく、感動する支援であるかぎり、若者は協力してくれています。

現在、街の再建計画も行われていますが、単なる「復興」ならばただ街を元に戻すだけのことになってしまいます。この機会を利用して次代への石巻の姿を考えると、気が持ちは街の方々は共有されています。しかし、国の補助金の一部は復興となれば、それは駄目だということになっていたりします。「復旧のためであり、復興ではない」ということを言われました。様々な制度のひずみに街づくりの計画は議論と試行錯誤の連続です。

一級河川なのに堤防が無いのが普通、「珍しい」と云う事も知らずに住んでいました。身近に川があったので、「水が上がりてるね」と、大雨

後は冠水するのが普通の風景なんです。震災後、中心市街地の空洞化が進み、街中の若い人、外の専門家を集めた協議会が始まっています。中央にある大手ショッピングモールが郊外に出来て、人の流れが変わってきています。街なか計画の協議会を作り、どのような街にしたいか考えたい。身の丈に合わない開発はしない。どういう街をつくろうか、中低層の街づくり、空き地、空間を生かした文化的な空間、そして子育てにやさしい街。それがこの街の新しく生まれ変わる姿なのかなと思っています。税金を使うので、行政の指導としては、目一杯建てなさいといわれますが、この地の身の丈にあった街づくりが大切だと思います。

○年半が過ぎて、4年、5年、10年先の支援やサポートを考えたとき、課題と問題は時とともに突然襲ってきますし、その時々に必要なことが見えてきます。ですから、これに支援して頂けるといふ選択肢を残しておいて欲しいのです。年々の東京オリンピッククマに来て、被災地を見て帰ろうという国内外からの方々が思うかもしれません。そのために頑張りたいですね。先の震災は一年に一度の事なので何をしたいなら良いかわからない。ただ、何かしたいな…と思う人は先ず私たちにその時の考えを投げて頂ければ良いと思います。この辺りは是非、国の方々にも理解をしてほしいところです。

●狩野 章(マリニピア・松島水族館に勤務。震災後「バレエが街にやってくる」を実行し街に活力を与えた人物)

\*経緯説明／「バレエが街にやってくる」は、黒木さんの発案・尽力により、狩野さんが実行委員長、阿部さんが副委員長になり、石巻の人々の強い熱意が松山バレエ団を動かして2014年3月15日に石巻中学校の体育館で開催の運びとなった。松山バレエ団の快諾、無償の公演、更に寄付の申し出でもあり1300名の観客を迎え大成功であった。市民の方々に大きな活力となった。

以前、私は、石巻市内の立町というアーケード



上・江戸時代。物資の交流で栄えた石巻市内。下・昭和5年。活気ある石巻の商店街の様子。



座談会の様子 / (左から) 黒木さん、野口さん、阿部さん、狩野さん、高橋の順

ドのある街中に住んでいました。その頃、萬画館を運営する会社にいました。街の中心市街地再活性の為にできた第三セクター「街づくりマンボウ」に参加して、素人集団で運営をしていました。今は松島から石巻を見えています。震災後、石巻の人でこの人、こんな力があるんだ…と再認識することがとても多いです。

石巻は、港町で対岸は魚市場で東洋一と言われる魚市場が在りました。漁師が宵越しの金は持たないと、気風のいい人が多かった。歓楽街もありましたし、昔から映画館もの件もあり、文化が根づいていて、貪欲な街のエネルギーがあった。それは、今でいう「コンパクトシティ」のようなものだった。今は、ボランティアの人が移って来て住んでいます。来る者拒まず…、若い人を受け入れる土地柄はあるんです。

昭和の初め、親父の時代には丁度、萬画館の下あたりに浮プールなど遊び場であったそうです。○年前、私が小学生の頃、貸ボートで中瀬を廻ったり、新しい橋が新設されて堤防が出来ると、この後○年風景は一変しました。現在も、新しい石巻を作ろうと、若者の新しいネットワークを活用して、世界中に発信したいですね。「中瀬」はニューヨークの中心マンハッタンにならって、「マンガタン」って言う、お話もありましたが、「金融」ではなく「情報」を、そして「文化」を発信して世界の中心にな



来場者の皆様

りましようって、思っています。物を頂いたり、何かを作ってもらうのは、もう終了かな、と個人的には思っています。

●野口隆亮株式会社代表取締役。イベント・コーディネーター)

私は、東京の住人ですが、地域との交流を目的としたワークショップを企画しております。石巻とは2011年6月から関わり始め、今年の9月15日に石巻中学校に1300名の観客を迎えて、地元の方と共に松山バレエ団の「白鳥の湖」公演を実現することができました。

今、石巻を客観的に見ますと、東京からの支援を受け慣れているように感じています。市民の方々は、寛容な方が多い。地域の方と上手くいく(よそ者に対する拒絶感が少ないという意味でも)地域であると感じました。何かやりたい衝動を持って向かい合ったとき、入口と成って頂ける人がいる地域は大変に貴重だと思います。震災以降、多くの若いボランティアの方々が全国各地から来てくれましたが、その中にはここに定着する人が出てきています。本来はあり得ない事だと思えます。地域への定着はとても嬉しい事です。居心地が良い、コミュニケーションに役割さえあれば外から入って来やすい、めずらしい地方都市だと思ふ。必要とされることの喜びを経験したことが、その人の生きがいとなり定着の動機となっているようです。今後、必要なことは私なりに見て、具体的な支援として在宅医療・ヘルスケアが大事だと思っています。

【完】

【座談会を終えて】第一回石巻編。それぞれこの地に生きる方にとって支援の意味や難しさを感じました。外部支援は、お仕着せでなく何が本当に必要なのか、行方側・受け側の問題が露呈した意見交換でした。短い時間でしたが問題点やこれから支援の仕組みに警鐘を鳴らす意見が印象的でした。まだまだやることはある、それが見えた気がしました。(編者)

「石巻編 かわら版」 平成二十六年十月十五日

○テキスト…小野行雄・高橋圭太郎(情・文委員)

○編集・担当…吉川盛一(情・文委員)

○発行…a a c a 情報文化協会